

- 1 . 宣告。マラキを通してイスラエルにあった主のことば。
- 2 . 「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。
あなたがたは言う。
「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。
「エサウはヤコブの兄ではなかったか。・主の御告げ。・わたしはヤコブを愛した。」
- 3 . わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。」
- 4 . たといエドムが、「私たちは打ち砕かれた。だが、廃墟を建て直そう。」と言っても、万軍の主はこう仰せられる。
「彼らは建てるが、わたしは打ちこわす。彼らは、悪の国と言われ、主のとこしえにのろう民と呼ばれる。」
- 5 . あなたがたの目はこれを見て言おう。
「主はイスラエルの地境を越えて偉大な方だ。」と。
- 6 . 「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。
もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。
もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。・万軍の主は、あなたがたに仰せられる。・
わたしの名をさげすむ祭司たち。
あなたがたは言う。
『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。
- 7 . あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と言う。
『主の食卓はさげすまれてもよい。』とあなたがたは思っている。
- 8 . あなたがたは、盲目の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。
足なえや病気のものささげるのは、悪いことではないのか。
さあ、あなたの総督のところを差し出してみよ。
彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。・万軍の主は仰せられる。・
- 9 . さあ、今、恵みを受けるために神に願ってみよ。
これはあなたがたの手によることだ。
神はあなたがたのうちだれかを、受け入れてくださるだろうか。・万軍の主は仰せられる。・
- 10 . あなたがたのうちにさえ、
あなたがたがわたしの祭壇に、いたずらに火を点ずることがないように、戸を閉じる人は、だれかいらないのか。
わたしは、あなたがたを喜ばない。・万軍の主は仰せられる。・
わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。
- 11 . 日の出る所から、その沈む所まで、わたしの名は諸国の民の間であがめられ、
すべての場所で、わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる。
わたしの名が諸国の民の間であがめられているからだ。・万軍の主は仰せられる。・
- 12 . しかし、あなたがたは、『主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている。』と言って、祭壇を冒瀆している。
- 13 . あなたがたはまた、『見よ。なんとうるさいことか。』と言って、それを軽蔑する。・万軍の主は仰せられる。・
あなたがたは、かすめたもの、足なえのもの、病気のものを持って来て、ささげ物としてささげている。
わたしが、それをあなたがたの手から、喜んで、受け入れるだろうか。・主は仰せられる。・
- 14 . 群れのうちに雄の獣がいて、これをささげると誓いながら、損傷のあるのを主にささげざる者は、のろわれる。
わたしが大いなる王であり、わたしの名が諸国の民の間で、恐れられているからだ。・万軍の主は仰せられる。・

説教

マラキは旧約最後の預言者で、捕囚期を終えて帰還した時代に預言者として活躍しました。最後の 4 章では「見よ。その日が来る。」と、キリストの到来とその前ぶれをなす「預言者エリヤ」の再来と言われたバプテスマのヨハネの登場を預言して、この書を閉じます。捕囚期当時のイスラエルの民の墮落に対して警告を発し、さらには世の終わりという最も大きな視点からの罪人の救いを預言しました。

今日から待降節(アドヴェント)が始まります。バビロン捕囚期 65 年目の待降節を過ごしている私たちは、マラキの預言からキリスト降誕の意味を共に学んでいきましょう。

その冒頭には「**宣告。マラキを通してイスラエルにあった主のことば。**」(1)とあり、神さまは、預言者であるマラキを通して御自身のみことばをお語りになることが「宣告」されています。その第一声は次のことばでした。「**わたしはあなたがたを愛している。**」(2) 神さまはイスラエルの民を愛していると言われます。これがマラキ書全体を貫く主題と言うべきものです。

そもそもイスラエルを愛していなければ、預言者をイスラエルに遣わすようなことを神さまはなさいません。イスラエルが滅びたままでよいと思っているならば、むしろ黙っておられたらいいのです。そして、滅びから救われる秘訣は、意地悪く黙っていて、彼らが滅びるに任せていたらいいのです。でも神さまはそうなさいません。むしろわざわざ預言者を遣わして、彼らに警告と悔い改めを迫ります。それはひとえに神さまが彼らを愛しておられるからです。彼らが滅びたままであることを望みません。滅びの中から立ち上がって、全うに生きてほしい、だから、神さまは彼らに預言者を遣わされました。預言とは神の愛です。救いを与えんとする神の愛です。神の愛のメッセージ、それが神の預言というものなのです。

それでは、「わたしはあなたがたを愛している」その神の愛とは一体どのようなものなのでしょうか。イスラエルは神さまに質問します。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」(2)神さまは答えます。「**エサウはヤコブの兄ではなかったか。～主の御告げ。～わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。**」(2-3)アブラハムの双子の孫エサウとヤコブのことを取り上げながら、本来は長男であるエサウを退けて弟ヤコブを愛した事実を話されます。このことは、神さまの愛がどのようなものであるかを最もよく説明するものです。神さまがヤコブを愛されたのは、ヤコブがエサウよりも優れた人物だったからではありません。性質で言えば、エサウは単純で軽率でした。これに対し、ヤコブは狡猾でほとんど詐欺師のような人物でした。どっちが神さまに愛される性格であるかということをよく話す人がいますが、聖書が言うのはそういう問題ではありません。最も単純に表現すれば、エサウも罪深かったし、ヤコブも罪深かったのです。人間の目には兄を騙したヤコブの方がさらに罪深かったと映るかも知れません。でも、神さまはそのようなヤコブを特別に選びました。つまり、本当に話にならない、この世で最も罪深いヤコブでしたが、それでも神さまはそのようなヤコブを選ばれました。彼を愛しました。「神の選民」と言えば聞こえはいいのですが、神さまに特別に選ばれてもしなければ救われることがない、それが「神の選びの民」の真相です。神の愛の意味です。「わたしはあなたがたを愛している」という言葉の意味です。ヤコブを愛された神さまは、この世にヤコブを造り、生かし、滅びゆくこの世からヤコブとその子孫を永遠の救いへと救い出してくださいました。これが神の愛です。この神の愛によって、イスラエルはこの世に造られ、この世に生かされ、滅びの中から救われました。この神の愛によって生かされてきたのがイスラエルでした。神に愛されているイスラエルは、神さまに愛されていることを心から感謝し、神さまに愛されている喜びをもって神と人を愛することを神さまから期待されていました。

しかし、6 節以降を見ると、その神さまの期待に応えることができなかったイスラエルの姿を見ることができます。神さまは言われます。「**もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。**」(6)つまり、神さまはイスラエルを世界で最も愛されたのに、イスラエルは神さまを愛していないと言うのです。彼らは神さまのことを「父よ」と呼びます。「主よ」とも呼びます。でも、そう呼ぶわりには「父」としての「尊敬」も「主」としての「恐れ」もありません。つまり、十戒の第三戒の戒めを破って主の御名を「みだりに(原意は‘空しく、意味もなく’)」唱えているのです。具体的には、彼らが「**主の食卓(ささげ物をささげる祭壇のこと)**」を蔑み、そこに「(カビの生えた余り物の)汚れたパン」、「**盲目の獣**」、「**足のなえたものや病気のもの**」、「**損傷のあるもの**」をささげていました(7,8,14)。本来は、まず十分の一を(あるい

は一番良い物を)神さまへのささげ物として取り分けてささげてから、残りで自分の生活をするというのが信仰あるあり方です。それなのに、イスラエルの民はその反対でした。自分のものを先ず何より優先して確保して、自分がたらふく食べてから、その残りを、つまり余り物を神さまにささげたのです。カビの生えたパン、売り物にならない「盲目の獣」、「足のなえたものや病気のもの」、「損傷のあるの」を神さまにささげました。

「わたしの名をさげすむ祭司たち」(6)と、神さまへのささげ物が蔑ろにされている責任が祭司にあると神さまは断罪なさいます。民たちが、自分たちの最も良い物ではなくて、いい加減な余り物をささげようと祭壇に持って来る現実を、祭司たちは指をくわえてただ見ていながら、「**主の食卓は汚れている。その果実も食物もさげすまれている。**」(12)と第三者的に評論している状況に対して、神さまの怒りが燃え上がります。民たちにささげ物について教えるのは祭司の役割なのに、それを怠る祭司を神さまは責めるのです。

そして、預言者を通して神さまは言われます。「**あなたがたは、盲目の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないのか。足のなえたものや病気のものをささげるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。・万軍の主は仰せられる。・**」(8)ペルシャに植民統治されているイスラエルにとって、王から派遣された総督の機嫌を損ねることは命取りです。それで、彼らは総督に気に入られようと、自分の一番良い物を、世界各国の珍品宝石をプレゼントしたことでしょう。それなのに、彼らは地上の支配者の機嫌を取ることに躍起になっているくせに、天地万物の支配者にいます神さまのためには、総督も喜ばないようなカビだらけのパンをささげてそれで自己満足しています。それで神さまは、「**わたしは、あなたがたを喜ばない。~万軍の主は仰せられる。~わたしは、あなたがたの手からのささげ物を受け入れない。**」と言われます(10)。そして、そのような「汚れた」礼拝をこれ以上ささげぬよう(「わたしの祭壇に、いたずらに火を点ずることがないように」)神殿の「**戸を閉じる人は、誰かいないのか**」(10)、「**群れのうちに雄の獣がいて、これをささげると誓いながら、損傷のあるのを主にささげるずるいは、のろわれる**」とまで言われるのです(14)。

イエスさまは、このような墮落した礼拝を回復するために来られました。結局、彼らがいい加減なものしかささげられないのは、要するに神さまの愛を知らないからです。別の表現で言えば、神さまを知らないからです。それで、イエスさまは直接この世に来て、「大いなる王」として君臨なさいます(14)。神を知らない彼らの所に、神ご自身が来て、神の愛を明らかになさいます。神ご自身が直接来て、この世を造り、私を造り、私を滅びから救い出し、私に永遠のいのちを与えてくださったことを教えてくれます。見せてくれます。どんなに悲惨な状況にあるかと、神に見捨てられたと思えるような状況にあるかと、私たちが神に見捨てられていないことを明らかにしてくれます。自分がどんなに罪深い者であろうとも、神が共にいてくださることを明らかにしてください。それで、キリストを知って、キリストの十字架によって罪贖われた者たちは、自分みたいな者でも神さまは愛してくださっている、見捨てられてはいない、生けるまことの小羊イエスさまは、私のために、私の身代わりに十字架に架かって死んで、私の罪を贖ってくださった、この事実を知って、主をあがめ、きよいささげ物をささげて、香をたくようになります。感謝して、祈るようになるのです(11-14)。そして、その結果、「**日の出る所から、その沈む所まで、わたしの名は諸国の民の間であがめられ**」、「**わたしの名は諸国の民の間で恐れられて**」、「**すべての場所で、わたしの名のために、きよいささげ物がささげられ、香がたかれる。**」ようになるのです(11,14)。